

八条院高倉の出生と出家

——来迎寺文書の資料など——

田 中 貴 子

はじめに

鎌倉時代の女流歌人、八条院高倉は、『新勅撰和歌集』に十三首もの入集をみるにもかかわらず、歌人としてはさほど注目を集めることのない人物である。作歌数が多くなく私家集も残していないこと、勅撰集入集数が歌集によりかなりの片寄りを見せていることなどが、彼女の歌人としての評価を困難ならしめているのかも知れない。高倉の場合は、生没年次はおろか、父親が説経の名手、安居院澄憲であることすら、それほど知られていないくらいである。

高倉の伝記については、既に安藤操氏、佐藤美知子氏らの詳細な御研究があり、高倉の生涯の大概を把握することが可能である。しかし、両氏の御論によっても未解決の問題は残されている。高倉の出生の事情、特にその母親の素姓について、また、出家したと言われている高倉の晩年の生活の様子などがそれに当たると。

出生については、大体の年次が推測されているものの、澄憲を父として生まれたということしか明らかではない。八条院出仕までの年月、彼女が育った環境は不明である。そして晩年、彼女は若年から抱き続けた出家の志を遂げて法の道に入ったと考えられている

が、出家前後の様相は全く知られていない。つまり、生と死という、人生のもっとも重要な階梯が謎に包まれているわけなのである。本稿では、この二点の問題と深くかわる記事を含む資料を紹介しながら、八条院高倉の伝記の、解明されていない部分に照明を当ててみたい。

(一) 高倉の出生

はじめに、先学の御研究を踏まえつつ、高倉の出生の問題を論じる。高倉の出生は、八条院への出仕と深いかわりを持つと考えられるからである。

八条院高倉は、その名が示す通り、鳥羽天皇の姫宮、八条院暲子のもとに仕えた女房である。父は当代随一の能説家、澄憲であり、母親は不明となっている(『尊卑分脈』に於て)。安居院家は澄憲の父、信西入道(藤原通憲)をはじめとして才能豊かな家系であったが、平治の乱による失脚の後、再び高位につくことはなかった。『尊卑分脈』によれば、澄憲の九人の子息全員が出家しており、政界に権勢の花を咲かせることは出来なかったらしい。女子の存在は、八条院高倉一人しか確認出来ない。

高倉は、こうしたいわば失脚した中流貴族の出身であるので、宮中では中麿程度の処遇を受けたようである。しかし、たとえ中麿であつても、当時並々な権勢を誇る女院のもとに出仕が叶つたことは、高倉の家の事情からすれば運の良い出来事だつたといえる。特に八条女院の場合、父の鳥羽院から伝領した膨大な莊園を有し、豊かな経済力と、その経済力が生み出す大きな政治的発言力を持っていた。従つて、八条院の女房という身分は、安定性に富む魅力的なものであつたと思われる。

しかしながら、この高倉の出仕について注目しなければならぬのは、さほど高位でもない僧の家の娘が、どのような経緯で八条院の女房となるを得たか、という点である。高倉の祖父に当たる信西が鳥羽帝に重用された事実はあるが、この縁のみによつて出仕の背景を説明するのは無理がある。私は、この出仕が他ならぬ高倉の母親の縁によるものと考えている。以下、この点について述べたい。

『建寿御前日記』には、建春門院崩御後、作者が仕えた八条院内の様子が描かれている。八条院の女房はみな裕福に暮らし、人数も多かった。それらの女房について、「昔はしらず、見し世となりては、うとき女房などのさぶらふもなかりき。ただ昔の御ゆかり、我が御乳の人のすゑずゑなどばかりさぶらひしかば、(吉典全書)」と記されるので、女院の縁故採用者で占められていたことが判る。本書の記述から判断するに、八条院女房には定員というものがなく、女院に關係を持つ女房たちが続々と詰めかけ、女院の方でもそれを無制限に受け入れていたものと思われる。

八条院高倉の場合もまた、八条院との縁故によつて出仕が決まっ

たとみられる。しかし、安居院家と八条院との間に濃いつながりは見出せない。別の強力な縁故によつて出仕したと判断される。常識的に考えれば、八条院に仕える(又は仕えていた)女房か、或は八条院に親しく出入りする近臣のついでであらう。『建寿御前日記』に、「刀目、女官などいふもののに、かずも定まらず、ものかかはり、なからんあと、など申して参らすれば、母か乳母が名にて、いくたりといふ事もなくて候ひて、」とあり、八条院に出仕していた女房の係累が、母や乳母の出仕名を継いで仕えたことが判る。従つて、高倉は八条院女房の誰かの猶子となるか、或は姉妹格となつて参院した可能性が高い。

この高倉の仮親については、佐藤氏は一つの回答を呈示されている。氏があげられているのは、御子左家の俊成、定家の存在である。俊成は妻子の多くを八条院に出仕させているので、高倉を猶子とするか、彼女の後見人となるかした上で、娘の誰かに伴わせて宮仕えに出したのではないか、という説である。氏は高倉と定家が歌合でたびたび番を組むことに着目し、安居院家と御子左家が主に出家者の師資の縁でつながりを保っていたことを論じられた。詳しくは氏の御論に譲らねばならないが、この両家のつながりを頼つて、澄憲が娘の身柄を俊成に預け、出仕の画策を依頼したというのが佐藤氏の結論である。

このことは、「高倉」という彼女の出仕名からも伺えるという。通常、出仕名は父兄の役職身分や邸宅のある地名を以て名付けるものである。「高倉」は、高倉小路の名に因むと考えられるが、彼女の周辺に高倉小路に邸宅を構える者は見当たらない。しかし、当時定家が高倉小路に別宅を有していたという事実があり、「高倉」の

名はそれによつたのではないか、と佐藤氏は述べられている。

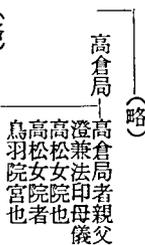
確かに、出仕名の問題も含めて、高倉出仕に俊成親子が関与したという説は説得力に富むといえよう。俊成の縁故ならば、高倉の八条院出仕は容易に実現出来る。しかし、佐藤氏の指摘された安居院家と御子左家の関係は、天台座主になつた俊成の兄、快修と澄憲子息との叡山に於る接触という迂遠な関係に基づいており、これを以て高倉出仕を依頼するほどの両家の親密さを説明し尽すのは難しく思われる。御子左家が高倉を引き受けた背景には、両家の関係より更に大きな要素が介在しているのではなからうか。

ここで私は、俊成に高倉出仕を依頼した人物として、澄憲以外の人間の考える。それも、おそらくは俊成が簡単には峻拒出来ないほどの権力を持つ人物だつたと想像する。結論から先に述べれば、その依頼者は出仕先の八条院その人だつたのではあるまいか。高倉出仕にはその母方の人物が関与しているという推測は既に述べた通りであるが、八条院こそが高倉の母と濃い血縁で結ばれた女性であつた。高倉と八条院との具体的な関係を示す資料は次節で述べるが、女院の血を引く高倉を猶子に迎えることは、御子左家にそれを拒否する術がないことは明らかであろう。それどころか、この猶子縁組は何らかのメリットをもたらしてくれるかも知れないのである。高倉が澄憲の娘ではなく、女院の血縁者であつたなら、この猶子関係によつて御子左家は八条院と更に強力な紐帯で結ばれることになる。八条院の側では、血縁者である女性を自らの元へ出仕させるまで信頼出来る臣下に預けること、御子左家の側では、高倉を通じて女院との間に信頼の連繫を強化することが各々可能となり、相互の利害が一致をみるのである。

このように、高倉出仕の裏には、八条院と御子左家の思惑が絡み合つている様相が伺える。そもそも、八条院の関与は高倉の出生の秘密と不可分な事柄であつたと思われる。八条院と血を分けた女性と推測される高倉の母の存在が、高倉の人生に影を投じているのである。次節では、新出の資料を中心に、高倉の母について述べよう。

(四) 「牙舍利分布八世」について

高倉の母の資料として以下に紹介するのは、滋賀県大津市にある聖衆来迎寺の文書に含まれる「牙舍利分布八世」(粟古史料編纂所の影写本による)の一部である。これは、仏宝として尊重された釈尊の牙舍利(歯)の伝来を系譜として記したものである。引用部分は、布引滝底の童宮からもたらされた舍利が、平清盛、観音房へと伝えられた続きに当たる。



この「高倉局」は、一見して八条院高倉を想起させる名前であり、父が澄憲という点も一致する。澄憲の娘は高倉一人しか確認し得ないが、もし他に娘があつたとしても、「高倉」と呼ばれる娘が複数存したとは考え難いので、この「高倉局」と高倉は同一人物とみてよいと思う。

ここで注目すべきは、高倉の母を高松院とする点である。高松院

妹子は鳥羽院の姫宮であり、八条院とは美福門院を母とする同腹の姉妹である。〔本朝皇胤統緒考〕。高松院は、姉の八条院に比べると女院中でも影の薄い存在だった。二条天皇の后となるも、安元二年、八二七六〇三六歳で崩じている〔女院小伝〕。高松院がもし本当に高倉の母親ならば、第一節に述べたような八条院と御子左家の連繫による高倉出仕の背景が導き出されるわけである。

「牙舍利分布八世」の成立は十四世紀頃と考えられるので、この記事が後代に捏造されたものである可能性も否定出来ない。しかしながら、高松院と澄憲とのゴシップを伝える別の資料が、角田文衛氏によって紹介されている。〔高松女院〕、「王朝の明暗」所収。昭和五十二年東京堂刊。

角田氏は、高松院の詳細な伝記考証を行われた中に於て、仁和寺の海惠僧都が女院と澄憲との間に生まれた子だと注する『玉葉』の記事をあげている。

今日、澄憲真弟子、御室御弟子、高松院御腹、澄憲寺、生之子也、難陀事人皆知之。於仁和寺受戒灌頂。依訪三其事二行向。（建久二年四月二十四日冬）

兼実の他には誰もこの秘密を書き留めた者はいないが、兼実の妻・兼子の母が高松院の乳母を勤めているので、情報の信憑性は高いと角田氏は述べられる。『玉葉』の記述では半は公然の秘密であったというから、むしろ何も書き残さない方が自然であったともいえる。

角田氏の調査によると、海惠はさほど見るべき業績がないにもかかわらず二十歳以前に権律師に任じられ、三十六歳で入滅するまでに権少僧都の位にまで昇った。これは、澄憲の九人の男子のうち、唱導名人の名を継いだ聖覚に次ぐ出世といえる。海惠は、たびたび

八条院の仏事に勤仕し、俊成や定家らとも親しかったという。このスムーズな昇進と、そして八条院の愛顧は、海惠が高松院の腹に生まれたことと無関係ではないと思われる。

本稿では、『牙舍利分布八世』と『玉葉』当該記事の資料的価値に対する審議はひとまず保留とした上で、角田氏の御説を肯定する立場をとりたい。そして、海惠だけでなく高倉もやはり高松院の娘であったと考える。その理由の一つは、諸先学が推定されている高倉の誕生年次が、海惠のそれと非常に接近していることである。高倉が生まれたのは、澄憲と高松院との交際が深まっていたと想像される期間内なのである。

海惠は、入滅時から逆算すれば承安二年八二七二〇の誕生となる。従って、角田氏は承安元年頃から高松院と澄憲の接近が始まったとされている。両者の接触の契機はよく判らないが、ともかく、澄憲は白河押小路殿に居住する女院のもとへ海惠誕生後も出入りし、二人の關係は女院が病で崩じた安元二年八二七六〇まで続いたとみられる。因みに、角田氏はこの病氣を妊娠に伴う疾患であったと推測されている。

続いて高倉の出生年次について見てみよう。高倉の出生年次は既述のように不明であるが、佐藤氏は和歌の詞書から、一応生年を承安三年八二七三〇から治承二年八二七六〇の間と推定されている。この説は、高倉とともに歌合に出席した他の歌人たちとの年齢的なつりあいから考えても妥当な線と思われる。もし佐藤氏の推定を信ずれば、高倉はまさに、澄憲と高松院との交際期間に誕生したことになる。彼女が二人の間に出来た娘である可能性は高い。更に想像を逞しくするならば、高松院崩御の原因は、高倉を出産した後の産褥

であつたかも知れない。

このように、高倉が高松院の所生とすれば、彼女が御子左家の猶子となつて出仕したという経緯の説明はたやすい。第一節で述べた、高倉出仕の背景に関する仮説——八条院の意志により御子左家が高倉の身柄を引き受けたこと——は、高倉が高松院の実娘であり、八条院とは伯母と姪の關係に当たることを前提とすればより明確にならう。

高松院が実母であつても、高倉は海恵と同様に密通の子であり、所詮世間には秘すべき存在である。性的乱脈に不感性となつていたのであろう院政期にあつても、一旦は后妃に上り女院の号を賜つた女性の密通はスキャンダルであり、たてまえだけでも隠蔽すべきものであろう。実際、高松院の異腹兄の後白河院でさえ、高倉の存在を感知していた形跡はない。

高松院は、しかも若くして崩御しているので、高倉は事実上有力な後ろ盾のない状況に置かれたわけである。彼女は、おそらく一旦は澄憲のもとに引き取られたかも知れないが、高松院の血を分けた女性を放置することも出来なかつたと思われる。このとき、高倉の将来を慮つて行動を起こした主謀者は、彼女の伯母である八条院ではなかつたか。

八条院は高松院の同腹の姉であり、日頃親しく往還してゐた。従つて、妹の密事の顛末を熟知していたことが考えられる。八条院は、妹の遺児である高倉を俊成に預けて養育させ、長成するに及んで今度は自らのもとに出仕させた、と想像される。高倉に対するこの処遇は、同じ境遇にある海恵をも優遇し、しばしば八条院の仏事に請じている事実と対応するものである。八条院は、妹の遺児たち

への責任と愛情、そしてそれを上回るスキャンダル隠蔽への意志に基づいて行動したと思われる。男子ならば出家をさせ、女子ならば自らの目が届く八条院女房とする、という処置である。

以上の論述は、推測の多いものではあるが、こう解すれば高倉の出生から出仕までの状況が筋道立って見えて来るように思われる。高倉が八条院という恵まれた主人を得たことは、彼女の出生の秘密を以てして納得されるべきものである。

(三) 高倉の出家生活と法華寺

前節までで、ひとまず高倉の前半生に関する論述を終えた。続いてはその後半生、特に出家後の生活について述べる。

高倉の生存が確認される最終年次は、嘉禎三年八一三三〇頃と言われている。嘉禎三年に行われたと思われる法印覚寛の七十首詠勸進に、高倉の詠歌が寄せられている。この歌の中で彼女は「六十の春」と詠んでいるので、このとき六十歳前後であつた可能性が高いという。しかし、生存は判明しても当時の高倉の動向までは判らないのである。

高倉には若年から出家の志が篤かつた、という諸家の説はあるが、これは彼女の歌の詞書、及び述懐性の強い歌の内容からの判断であつて、具体的な出家の時期や出家後の居住地などは全く不明である。

佐藤氏は、嘉禎元年八一三三五当時、高倉が出家の身であつたらしい資料を『明月記』からあげられている。『明月記』には「高倉」という名を持つ人物は男女問わず極めて多数登場する。その中で、氏は定家や聖覚と親しく接触している「高倉殿」なる人物を高

倉に比定されている。特に嘉禎元年二月二十一日条に於て、聖覓の病氣見舞に訪れ、同席していた定家と同車して帰った「高倉殿」は、僧を伴っていることから自身も出家の身であったのではないかと、氏は考えられる。

しかし、繰り返すようであるが「明月記」中の「高倉」名を持つ人物は甚だ多いので、このうちの誰かが高倉である可能性が高い代りに、誰もが高倉でない可能性もまた高いといえる。特に、嘉禎元年二月二十一日条の「高倉殿」は、同書嘉禎元年十一月十三日条に死没記事がある「資雅卿姪土御門院高倉殿」と同一人であることが知れるので、八条院高倉とは明らかに別人である。また、僧と同行しているからといって必ずしも当人が法休であるとは限らない。

ただし、高倉出家の事実は或る程度資料から伺える。金沢文庫に残る古文書の中の『法花法』(金沢文庫古文書・論語篇)所収、二三八五番に次のような識語が見られる。

写本云觀皇院云、

今次第者故遍智院僧正(注・成賢)御草也、依故高倉局之命被作此次第也云々、高倉殿者安居院澄憲法印息女云々、

これは、高倉が本書をい、とに当たる遍智院成賢に書かせたというものである。成賢の父、成範は澄憲の兄であり、この醍醐にて出家していたい、と高倉が親密であったことは充分考えられる。だがそれだけではなく、高倉が成賢に聖教の作成を依頼出来たのは、彼女の出家の導師を成賢が勤めた縁があつたことではないだろうか。或いは、成賢の手引きで高倉は出家後一時的に醍醐あたりの房に住したとも想像される(醍醐と高倉の関係については後述)。ともかく、この識語は高倉出家を裏付けるための一補助線となろう。

次に紹介したいのは、高倉の晩年の姿らしき尼僧が登場する『法華寺舍利縁起』である。これは南都国分尼寺である法華滅罪寺に伝わる舎利の由来を、西大寺の數尊が記したものである。

南都法華寺ニ在ニ仏舍利。屢ニ現ニ奇異ノ神変ニ。普ク催ニ道俗ノ信心ニ。尋ニ其根源ニ。有ニ一人禪尼。其ノ名ヲ曰ニ空如ト本号高。稟ニ天性ヲ敏聰ニ。自ニ少年ニ入ニ仏道ニ。頭密ノ之学。和漢ノ才。世之所ノ知。人ノ所ノナリ嘆也。老年ノ之後慕ニ本願ノ昔ノ蹤ニ。隱ニ居ニ法華寺安居房ニ。偏積ニ事理ノ之行業ニ。

(西大寺數尊伝記集成)所収)

法華寺の宝物であるところの舎利の本源は、空如なる尼の所持する東寺伝来の舎利に溯る。彼女は、釈念、法華寺長老慈善とともに唐招提寺へ参籠した折、自ら感得した東寺舎利の真偽を確かめようと鉄鎚でそれを打つ。真の舎利ならば金剛石よりも堅固な筈だからである。果たして舎利は貴い光明を放つて碎けるが、その後破片は各々が新たな舎利となり分布したという。以上が当縁起の粗筋である。

この舎利は重要な問題を含むと思われるが、今はひとまずおいておこう。引用文中の空如の割注に注目すると、「本号高倉局」とあることから、彼女がもと高倉局と呼ばれた宮廷女房であつたと察せられる。とすると、この空如が高倉の法名である可能性があるのではないだろうか。

空如らしい尼の消息はまた、數尊の『金剛仏子觀尊感身学正記』中巻、建長三年八二五ノ条にも伝えられている。

又一人禪尼高松女院尼僧、始母高倉殿、於法華寺卒去。問目後。夢中告法華寺長老慈善

比丘尼覺子曰。欲訪無人。可供養十六羅漢云。

(西大寺藏書傳記卷六)

この禪尼は、法名こそ記されないが明らかに空如を指している。

「高倉殿」というものと名前、そして慈善との師弟関係から見て空如以外とは考えられない。これを空如とすると、割注にある高松女院の姫宮という注記から、空如と高倉は同一人物として間違いはなからう。右の夢告があつたのは建長三年なので、そのとき既に高倉が没していたことも判る。

先に引用した『法華寺舍利縁起』では、空如が生まれながらに聡明で、信心篤く、顯密の学問に通じ和漢の才に明らかつたとする。

これは、高倉が若くして仏道を希求し、また、和歌の詞書にしばしば白楽天詩の一部を用いることなども相通するだろう。

さて、『感身学正記』の割注には、「高倉殿」の他に「醍醐殿」という名が見える。これは、高倉が醍醐周辺に一時居住していたことを示すものと考えられる。『法華寺舍利縁起』から判るように、高倉は出家後すぐに法華寺に住んだわけではないからである。醍醐とは京都南東部一帯を指し、平安時代から醍醐寺という大寺院を擁する真言小野流の拠点として栄えていた。醍醐寺は勿論尼寺ではないが、その院家に尼が止住したことは、『とはすがたり』巻一に見える勝俱胝院の様子から伺える。また、九条家文書中の「真阿弥陀仏文書紛失状案」(天徳元年十一月付)によると、比丘尼真阿弥陀仏が醍醐に自房を構えていた事実が明らかである。従つて、高倉が法体となつて一時醍醐の房に身を寄せていたことは想像に難くない。

『とはすがたり』の勝俱胝院の場合を例にとると、ここは身より

のない尼たちが集まる場所であつたといふ。朝の勤行の時刻、尼が「あやしげなるころもに、まげさなどやうの物、けしきばかりひきかけて」(岩波文庫)通るさまは、尼たちが決して経済的に豊かでない状況を表わしている。おそらくは身よりのない後家尼や、家庭を持つに至らなかつた宮廷女房が出家し、肩寄せあつて暮らす場所であつた。高倉もまた、宮中を出てからは全く後ろ盾を失い、こうした尼たちの住む醍醐に宿りせざるをえなかつたのではなからうか。

こうしてみると、高倉の出家の時期も自ら想像されるように思ふ。つまり、彼女が出家したとき、その後ろ盾は既に失われていた状況であつたと考えられるのである。佐藤氏は、高倉が建暦元年(一二三二)の八条院崩御を契機にしたと考えられるが、この説は後ろ盾のない彼女の状況と照応するものである。出仕先の主人の崩に遇つて女房が出家する例は、建春門院崩御の際、常陸という若女房が出家した例(建春御前日記)や、春華門院の際に一人の女房が都を出奔し法華寺に入った例(後述)などが見出せる。高倉の場合、八条院は主人でもありまた、保護者でもあつた。出家の動機として、女院の崩御は充分すぎるものであろう。当時、既に実父の澄憲は没し(建三三三没、後見者の俊成もまたこの世にはなかつた(元久元年没、建三三三没))。家庭を築くことのなかつた高倉は、出家後の行き場がない状態だつたわけである。

高倉の出家前後の事情を、今までの論に沿つてまとめてみるならば、彼女は八条院崩御を契機に出家を果たし、一時醍醐の房に住まい、その後老年に至つて法華寺の安居房に隠棲しそこで卒去した、ということにならう。法華寺は、言うまでもなく園分尼寺として律

令制に基づき建立された寺院であるが、鎌倉時代は律宗の叡尊の手で復興され、戒律興行が行われていた。宮廷女房や貴人の妻娘が受戒した例も数多い。高倉の場合、直接法華寺で受戒したわけではないが、彼女が最終的に法華寺を終焉の場に選んだ背景には、中世の法華寺が宮廷女房出身の尼を多く受け入れていた事実が存すると思われる。

次節では、高倉の出家のあり方とよく似た例として法華寺初代長老となった慈善の場合を見ていきながら、鎌倉時代の法華寺と宮廷女房の出家の様相を捉らえてみたい。

(四) 法華寺の尼たち

前節でも述べたように、南都法華寺は光明皇后の御願寺で、正式名を法華滅罪之寺という。当寺はしかし、律令制の衰退に従い、平安時代には荒廃の一途を辿った。十三世期初頭の俊乗坊重源らの堂宇補修を経て、漸く鎌倉中期に至り、南都旧仏教の戒律復興運動とともに再興される。法華寺復興に特に力があつたのは西大寺の叡尊である。彼は、法華寺でさかんに尼衆の授戒を行った。叡尊の『金剛仏子叡尊感身学正記』や『西大寺勅謚興正菩薩行実年譜』を繙くと、公家の女性の受戒の記事が散見される。叡尊が女人の戒律興行を尊重したことを示すエピソードは、『興正菩薩御教誠聰聞集』（日本思想大系「鎌倉仏教」所収）に伺える。叡尊が鎌倉へ下った折、北条時頼に引留められ、「僧ハナニトモ候ハンスズレドモ、尼寺ガ叶マジキ、皆女人ノ法ガ失候ハンスルガ、不便ニ候程ニ上リ候ハンスル」と返答したという。女性が法華寺に集まった背景の一つには、こうした鎌倉時代の律宗の盛況が存するといえる。

また、それとは別に社会的な要因も見逃すことが出来ない。平安末期から鎌倉時代にかけて、家父長権の伸展に伴い女性の社会的地位が低下した現象がそれである。通い婚を主とする平安時代においては、結婚し家庭を形成することが必ずしも女性の生涯の安泰につながらなかつた。女性は結婚後も実家の庇護を受けており、しばしば一時的な関係に終わることの多い婚姻相手よりも実家との縁の方がはるかに強固で永続的なものを感じられていたはずである。宮仕えの女房にとっては、自分の実家さえ安定を保てば老年の生活も保障されていたといえる。

しかし、結婚形態が嫁取り婚へと移行した鎌倉時代では、宮廷女房の場合、夫の家の一員として家庭を築かない限り老年は悲惨なものになってしまう。鎌倉期の宮廷女房は、一見華やかなサロンの住人と見えながら、その実、天皇や上皇を頂点とする後宮に囲い込まれ、平安時代のような一種の自由結婚の機を得難い状況に置かれていた。そうした中で、運良く天皇の子を生むことが出来た女性はよいとして、独身者のまま年を重ねた女性は何ら老前の保障もないまま放置された。

法華寺をはじめとする幾つかの尼寺は、このような女性の終の住処として機能していたという。法華寺に入った女性たちは、物語にも登場する。例えば、『平家物語』巻十一「横笛」の横笛は、滝口入道と別れて後法華寺に入り、そこで没したと語られ、また、同じく巻三「有王」では、鬼界島に流された俊寛僧都の娘が十二の年に尼となり、法華寺で両親の後世を弔ったとされる。これらは物語の中の人物であるが、寄る辺ない女性が法華寺へ赴かざるを得ない事情を端的に物語る例といえよう。

物語のこうした事例は、とりもなおさずその当時の現実を反映していると思われる。実際の例をあげるならば、『十六夜日記』で著名な阿仏尼も若年の頃法華寺に住んだことがあったらしい。『源承和歌口伝』第十一「訓説おもひくゝなる事」に次のような条がある。

……先由来は阿房（阿房）安嘉門院越前として侍りける、身をすてゝ後、奈良の法花寺にすみけり。後に松尾慶政上人のほとりに侍りけるを、源氏物語かゝせんとて、法花寺にて見なれたる人のするべにて、院大納言典侍（二條）もとにきたれり。統後撰奏覽之後事也。

〔校注阿仏尼全集〕

阿仏はかつて恋に破れて出奔し、西山辺の尼寺で出家の志を遂げたという（うたたれ）が、その後、年を経て再びまた尼寺へ入ったわけである。この記事は、福田秀一氏によれば建長四年（一二五二）頃のことらしく、阿仏は推定三十一歳になっていた。阿仏もまた、若年の頃は家庭を持つことの出來なかつた宮廷女房の迎の道を歩んだといえる。阿仏が後嵯峨院大納言典侍・為子を知る媒介となつたのが法華寺での知己だが、おそらく法華寺には大納言典侍の同僚であつた女房が尼となつて止住してゐたと思われる。このことから、宮廷女房と法華寺とのつながりが並々でないことが伺える。

細川源一氏は、こうした女性の例として、春華門院女房であつた法華寺長老・慈善比丘尼の場合を紹介されている。以下、本論の主題である八条院高倉と深いかわりを持つ慈善について述べたい。

慈善の素姓は、『法華滅罪寺縁起』の次の記述から知れる。

慈善比丘尼 聖恵房。法華寺ふたゝひ興行のゝち第一番の長老。

俗性ハ春花門の女房。新多もんのかうのとの。

既述したように、慈善は春華門院の崩御（建暦元年（一二二〇）一月八日）に遇い、都を出奔して法華寺に入った。⁽¹⁸⁾この頃、法華寺はまだ敬尊を迎えてはいなかつたが、重源の堂宇補修（建仁三年（一一二〇）三）、『無爾阿弥陀仏作樂』による）が完了し、復興の気運が高まりつつある状況であつた。

この慈善は、第三節所引の『金剛仏子敬尊感身学正記』建長三年条から、空如、即ち高倉の弟子であつたことが判る。『法華寺舍利縁起』には、二人が連れ立って唐招提寺の釈迦念仏会に赴いたことが記されており、法華寺に於て篤い師資関係が結ばれていたと想像される。しかし、二人の関係は出家以前の女房時代に遡ることが出来るであろう。慈善の仕えた春華門院は、生後間もなく八条院の猶子となり、両院は『建寿御前日記』に「又、障子一つが隔てなれど」とあるように同宿の状態であつた。お互い出仕先は異つても、両院が殆んど同じ邸に居住しているわけなので、慈善と高倉が女房時代に知り合うことはごく自然なことと思われる。また、主人同志の親子関係は、そのまま各々の女房の上下関係に影響されるであろう。従つて慈善と高倉の師弟関係は、女房時代の関係を持ち越したものと考えられる。

先に、高倉の出家は八条院崩御が原因だという推測を述べた。八条院崩御の同じ年である建暦元年、彼の院からわずか四月余り遅れた十一月八日、春華門院は十七歳の短い命を終える。慈善はこのとき出家したので、出家の順から言つても高倉は慈善の先輩格に当たるのである。慈善の突発的な出奔は、既に出家を果たしてゐた先輩女房である高倉の行爲を見習つてのこととも思われる。従つて、二人の師弟関係は、逆に言えば、高倉が建暦元年六月二十六日の八

条院崩御の後程経ずして仏門に入ったという推測を一層確実なものにする。

法華寺初代長老・慈善の師であつた高倉は、法華寺の律衆比丘尼の嚆矢として位置づけられる。高倉が、法華寺の最重要の舍利の縁起に重要な役割を果たしているのは、彼女が、律宗の中興した新しい法華寺の起源を語る人物と考えられたからではなからうか。鎌倉時代の女性と律宗を考える際に忘れてはならない存在の一人だと思われる。

高倉は、晩年法華寺の安居房で仏道精進に明け暮れ、遂にそこで卒した。その没年は明らかではないが、『法華滅罪寺年中行事』(大和古寺大観第五卷)の八月十三日の項に、「醍醐殿御忌日」という割書が見出される。他にも尼たちの忌日を記しているもので、これがかつて醍醐殿と呼ばれたことのある高倉の忌日であつても不思議はないのではないだろうか。

おわりに

八条院高倉の出生と晩年の部分に限って、かなり大胆な推測も交えながらその伝記を考察してみた。高倉の歌については今回全く触れる余地がなかったが、歌人として以外でも、高倉の存在は興味深い要素に彩られている。本稿では、後半部に於て、やや本論から逸れるかたちで宮廷女房と法華寺との関係を述べたが、平安最末期から鎌倉時代という、様々な環境が変化を余儀なくされた時代の境界線上を生きた女性の一人として、八条院高倉はもっと注目されてもよい存在であると思う。高倉を視点軸に据えることで、彼女の周辺の人々の人間関係や時代の諸相が新たな意味に読み換えられること

が可能かも知れないのである。

(昭和六十二年十月十八日稿)

△注▽

- (1) 「八条院高倉」(『字苑』、昭和三十二年九月)。
- (2) 「八条院高倉の論(一)・(二)」(『大谷女子大学紀要』、昭和五十年十月・五十二年十二月)。
- (3) 「御室ノ坊官行賢法印後胤ノ女。安居院澄憲法印ノ後胤ノ女。八幡洞官ノ女ハ中廊ニ被召仕也。」(『海人藻芥』・群書類従第二十八卷)。
- (4) 「牙舍利分布八粒」は末尾に乾元二年八二三〇の年記を持つ。但し、本文中には嘉暦元年八二三六、文和二年八三五六の記事も見える。
- (5) 本稿第三節冒頭に概要を示した。嘉禎三年八二三七頃に六十六歳前後であつたらしいことからの逆算による。
- (6) 角田氏前掲論文所載の年譜参照。
- (7) 「和歌大辞典」(明治書院、昭和六十二年)の「高倉」の項による。
- (8) 「新勅撰和歌集」卷十八、雑三、一二六二番等。
- (9) 尼の寺院止住については、西口順子氏「女の力」(昭和六十二年、平凡社)に詳しい。
- (10) この文書の存在は、日本の女性と仏教第四回サマーマセミナー(昭和六十二年八月二十六・二十八日)に於る土谷恵氏の御発表「僧侶と氏・家・女性——平安末・鎌倉初期の醍醐寺を中心に——」によつて知った。
- (11) 松本寧至氏「中世宮廷女性の日記」(昭和六十一年、中央公論社)による。

(12) 高倉の醍醐止住には、安居院の男子で醍醐寺に入った真言僧(勝賢、成賢等)の存在が関係しているのかも知れない。

(13) 細川涼一氏『中世における律宗寺院と民衆』(吉川弘文館、昭和六十二年)。

(14) 細川氏前掲書によると、法華寺の他に中宮寺、道明寺といった尼寺も同様の機能を有していた。特に中宮寺については、阿部泰郎氏「中世南都の宗教と芸能——信如尼と若宮拝殿巫女をめぐるて——」(『国語と国文学』昭和六十二年五月号)にも触れられている。

(15) 但し、横笛と俊寛の娘の場合、『平家物語』諸本によつては法華寺ではなく嵯峨や高野の天野別所に籠ったとするものもある。

(16) 『中世和歌史の研究』第三章「阿仏尼と為相」(昭和四十七年、角川書店)。

(17) 細川氏前掲書。

(18) 『明月記』建暦元年十二月二十三日条。

〈付記〉

成稿に当り、阿部泰郎氏、細川涼一氏、稻賀敏二先生より御教示を賜りました。また、東京大学史料編纂所には、資料閲覧の便をお計り頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

なお、校正後細川氏より大塚実忠師の御論考、「法華滅罪寺中興聖惠房慈善」(『日本仏教』第二十八号、昭和四十三年七月)の存在を御教示頂いた。本稿とは異なる視点から、高倉と慈善の出家について述べられた手堅い御論である。本文中に生かせず残念ではあるが、併せて御参照頂きたい。また、細川氏の「王権と尼寺」(『列島の文化』昭和六十三年、日本エディタースクール出版部)もその後公刊された。法

華寺などの尼寺に止住する独身者としての尼と舍利信仰に関する御論であり、本稿と深いかかわりを持つと思われる。これらの御研究を参考にさせて頂き、更に考察を進めていく所存である。

—— 広島大学文学部助手 ——